

## 『坂田一男展－前衛精神の軌跡－』

本展には代表作の他これまで未公開の作品多数を含む約200点の作品を展示する予定です。作品の調査とともに、自筆草稿や書簡に書かれた文章から足跡を確認し、坂田の芸術についての考え方を把握し紹介したいと思っています。

坂田家は現在の井原市美星町という山間の地に在って、数多の優れた人物を輩出してきた名家です。坂田一男はそのいわば直系にあたり、父快太郎は岡山大学外科の開祖と言われる優れた外科医でした。また叔父の坂田貢は玉島の干拓を成し遂げた事業家でした。坂田の人々をみると、様々な分野で先駆的なバイオニアとしての仕事をした人が多く、坂田一男が絵画の分野で果たした役割も「日本の抽象絵画の先駆者」でしたから、これは血筋というべきでしょう。恵まれた生活環境に育ち、医者への道を志いますが、高等学校入試で失敗を重ねてしまいます。名門の御曹司ということが重荷になったのか、それとも自分の本当にやりたいこととの乖離が大きかったのか。とにかく精神的に追い詰められた状態になり、そこからの回復の手段の一つが絵を描くことでした。上京して絵を学び本格的に画家への道を歩み始めます。1921年に渡仏し、最初フォーヴィスムのオトン・フリエスに、次いでフェルナン・レジに師事しました。折角パリで学ぶのなら日本人に無いものを学び取ろうと決意し、知的な手法を駆使するキュビズムから入り抽象絵画へと進み、前衛美術家として第一線で活躍したわけです。1933年に帰国後は倉敷市玉島にアトリエを建て孤高の内に造型の探求に取り組みました。そして戦後はA.G.O.（アヴァンギャルド岡山）を組織して、自らの信ずる前衛芸術の擁護と展開に立ち上がり、果敢に活動しました。

坂田が追求したのは「秩序と均衡の美」であろうと思われます。様々な対象を取り上げながらも、その解体と再構成を通して、余計なものを排除し簡潔な形と線、抑制された色彩によって表現される世界です。絵を売ることを嫌い、「前衛は無位無冠」等坂田の語った言葉も含蓄に富んでいて、芸術家や作品のありかたに大きな示唆を与えてくれます。【主任学芸員 妹尾克己】

## ・記念講演会「坂田一男 探究の普遍性 同時代美術に照らしつつ」

日 時 10月20日[土] 14:00~15:30

講 師 水沢 勉

(神奈川県立近代美術館企画課長)

場 所 講義室 先着70名 講義無料

## ・美術館講座「坂田一男－前衛精神の軌跡－」

日 時 10月7日[日] 14:00~15:30

講 師 妹尾克己(主任学芸員)

## ・美術のタペ

「坂田一男展を見る①」妹尾克己

日 時 9月28日[金] 18:00~19:00

「坂田一男展を見る②」廣瀬就久

日 時 10月26日[金] 18:00~19:00

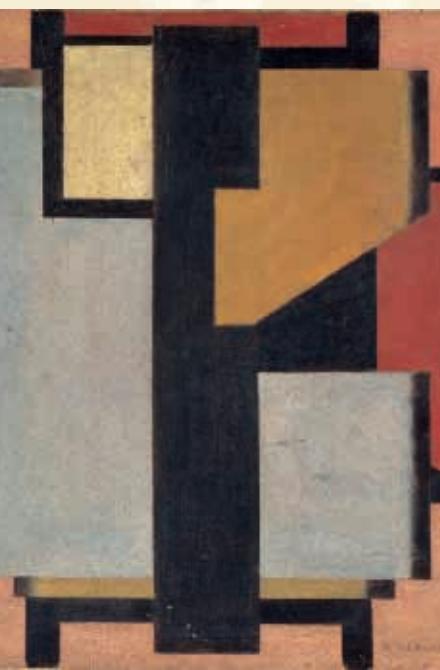
9月28日[金] ~11月6日[火]



「坐る女IV」

1926年

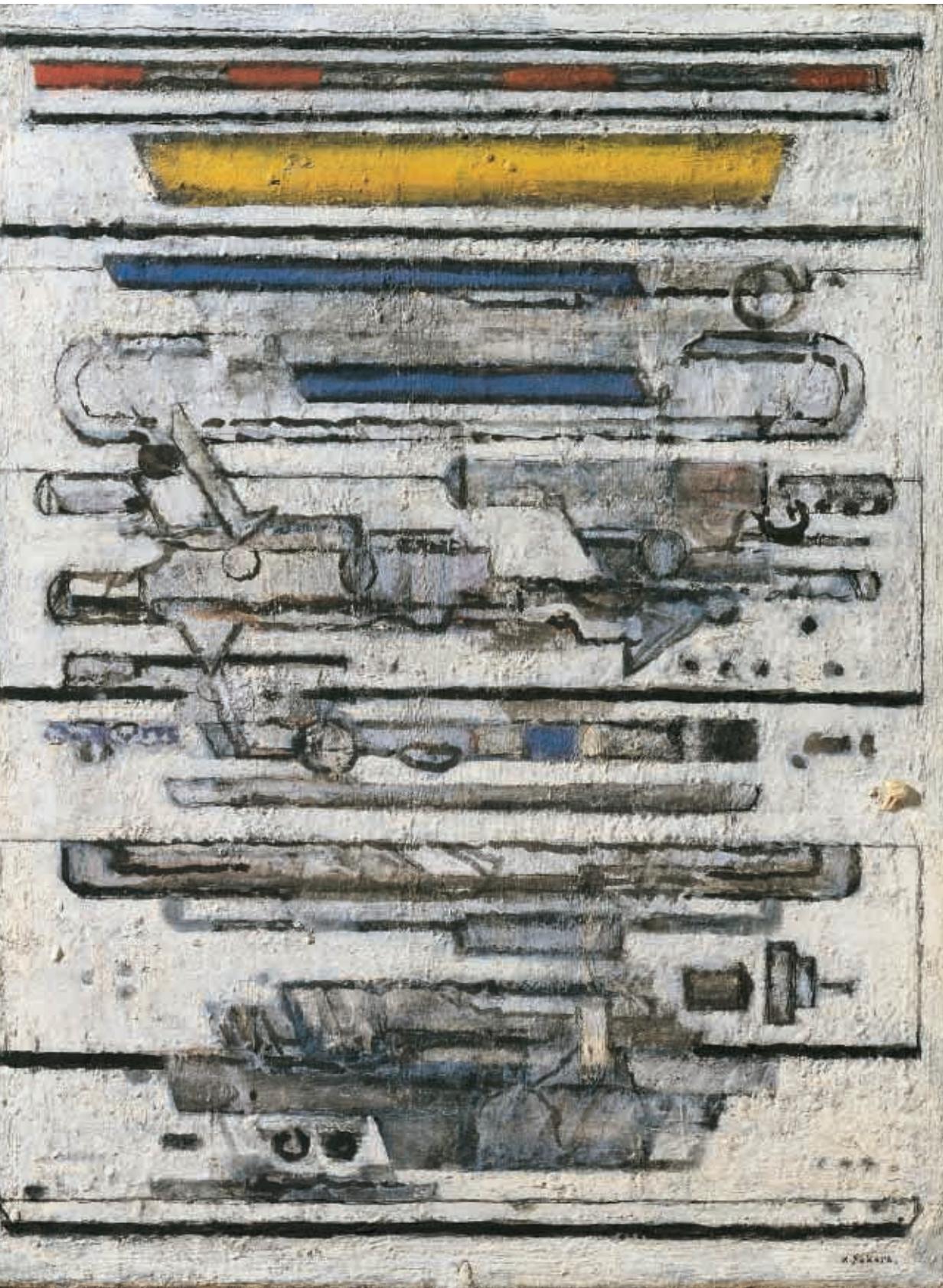
個人蔵



「コンポジション」

1936年

個人蔵



『ひとがた流し』表紙  
(2006年7月初版、朝日新聞社)  
初出「朝日新聞」2005年8月20日～2006年3月  
23日(岡山県立美術館が物語に登場したのは  
2006年2月18日、19日分です)

## お知らせ 北村薰『ひとがた流し』

北村薰さんの長編小説『ひとがた流し』をご存じですか？

中堅の女性アナウンサー“千波”と彼女の二人の旧友“美々”と“牧子”という、3人の女性を中心とした3つの家族の物語です。それが抱く思い出や暮らし、乗り越えなければならない現実、そして互いへの深い愛情などが、淡々とした、しかし優しさのある口調で描かれています。水面のさざめきのような静かな感動が心に広がる作品です。

実はこの小説には、岡山県立美術館が登場します。物語終盤、千波はパートナーである良秋とともに徳島へ旅するのですが、その帰りに当館を訪れるのです。二人は実際に当館の売店で売られているマッチ箱のセットを見つけます。そして、美々と牧子のお土産に2セットを購入し、東京で二人に手渡します。

新聞での連載では、おーなり由子さんの手による挿画が添えられ、現在では、同じくおーなりさんの手による柔らかなブルーの装画が施された単行本となって、書店に並んでいます。【学芸員 山吹知子】

企画展示  
のご案内

日本赤十字社岡山県支部創設120周年記念特別行事  
日本赤十字社所蔵美術展－人道と平和への想い－

平成19年  
10月23日[火]～11月6日[火]

## 展覧会

9月28日[金]～11月6日[火]  
坂田一男展－前衛精神の軌跡－

11月15日[木]～12月2日[日]  
第54回 日本伝統工芸展岡山展

12月15日[土]～24日[月]  
第67回 国際写真サロン入選作品展

## 社会人のための美術のタペ

9月28日[金] 「坂田一男展を見る①」  
<妹尾>

10月26日[金] 「坂田一男展を見る②」  
<廣瀬>

11月23日[金・祝] 「日本伝統工芸展を見る」  
<福富>

各特別展観覧料が必要です  
時間 18:00-19:00 会場 当館 展示室 <>… 担当学芸員

美術館講座  
事前申込み不要(聴講無料、先着順)

◆9月15日[土] 「イサム・ノグチの仕事  
—パリ・ユネスコ庭園—」  
講師:山吹知子(学芸員)

◆10月7日[日] 「坂田一男－前衛精神の軌跡－」  
講師:妹尾克己(主任学芸員)

◆10月20日[土] 「坂田一男 探究の普遍性  
同時代美術に照らしつつ」  
講師:水沢 勉  
(神奈川県立近代美術館企画課長)

◆11月3日[土] 「日赤コレクション  
—その概要と収集の経緯—」  
講師:齋藤武郎(学芸員)

◆12月8日[土] 「岡山と荒川豊蔵」  
講師:福富 幸(学芸員)

時間 14:00-15:30 会場 ◆地下1階講義室  
開場は13:30 ◆2階ホール

編 集 後 記  
本頁で紹介した北村薰さんの小説で、当館が舞台となった場面が紙面に掲載されたのは、2006年の冬であったと思う。自分を取り巻く現実がフィクションの世界でも展開するというのは、何とも不思議な感覚で、同時に大きな感動であった。

当ニュースで紹介するのが、単行本が発刊されてから一年が経つこの時期になってしまったことをお詫びするとともに、このような貴重で愉快な経験をもたらしてくれた作品著者に、心から深い感謝の意を述べたい。

## 美術館ニュース 78号

発 行:2007年9月  
発行者:岡山県立美術館  
〒700-0814 岡山市天神町8-48  
TEL 086-225-4800  
URL <http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/index.html>  
E-mail [kenbi@pref.okayama.jp](mailto:kenbi@pref.okayama.jp)

世界を開拓している。  
ところどころに絵の具の塊があり、ざらざらとした画面である。そのように荒々しい要素を含みながらも、画面全体は静謐を湛えているのはなぜだろうか。作品の赤・黄・青の長方形の物体がこの作品を色鮮やかに彩っていることで、神秘的ともいえる独自の  
坂田一男（一九五五年）  
「コンボジション（メカニック・エレメント）」

## 鍵岡館長の 美術隨想

美術館とは何かと大上段にふりかぶり、現在において公立の美術館とは何かを少し考えたい。日本の美術館は各県ごとにほぼ出揃っている。あとはんの少し文化館や博物館との併設館があるが、道州制を迎える公立美術館の将来を見据えたい。

公立美術館は何故必要なのか。そもそも人類は先史時代から美術という形式でコミュニケーションをとってきたといえる。美術は美術に関心のある特定の人々のために在るようのみられがちであるが、美術という形式こそが私たち誰もが利用できる普遍的な言語であり、美術や芸術こそがいつの時代にもその時代の「今」を生き抜く勇気や希望を精神的にも肉体的にも与えつづけてきた。

その集積である人類共通の文化遺産を美術館は守りつづけてきた。21世紀に入り、科学技術の進展、加速する情報化、生活環境の急激な変化、グローバリゼーションらが地球規模で変革する時代、こうした時代であればこそ美術館の基

本的な使命は拡充される必要がある。美術館の基本的な使命は何より、芸術作品の収集、保存と修復、調査・研究機能の充実が求められる。その上にたっての幅広い展覧会の開催、普及教育の拡大、とりわけ生涯教育や次世代教育への貢献、こうしたこととはなによりも地域社会との調和である、と公立の美術館の存在を考えたい。

芸術作品は私たち人間の共通の憧れを目にみせる形で表現している。こうした芸術作品を収集する美術館は、専門的な知識や能力でその収集品を調査研究し、発掘や発見し、そこから生まれる展覧会、作品展示はもうひとつの創造の場である。ポスター一枚からして作品となり得る展覧会は、人々を啓発しつづけ、人々はこの創造の場に参加し、芸術や芸術家と人々とのコミュニケーションの場となり、自己発見の場となり、社会や地域に還元されて、美術館は地域生活のなかに溶けこむ。生活と芸術が活性化された文化力こそが、社会をダイナミックに活動させる。

芸術文化は市民の生活の質を高め、創造力を引き出す。文化が高く、創造力のある街に人間も経済も集積する時代となっている。公立美術館はその中心の重要な場に位置すると思えるのである。

【館長 鍵岡正謹】

## よそんちの展覧会 藤本由紀夫 3つの展覧会



関西の3つの美術館で、アーティスト藤本由紀夫（1950—）の個展がほぼ同時期に開催されている（原稿執筆時）。西宮市大谷記念美術館の「哲学的玩具」（2007年6月30日～8月5日）、国立国際美術館の「+/-」（7月7日～9月17日）、和歌山県立近代美術館の「FUJIMOTO and」（7月14日～9月24日）と「ハッピーコンセプチュアル」（7月14日～9月2日）である。今年はじめて上陸した台風が中国・近畿地方を過ぎ去った翌日、藤本巡りの旅に出た。

藤本由紀夫は、「音」をテーマにした作品の制作を続けるサウンドアーティストである。その活動は、国内外で高い評価を得ている。大阪芸術大学在学中に当時最先端の機材と講師陣といふ環境で電子音楽を学んだ藤本は、70年代には電子音の研究と生成に興味を持つ。しかし、80年代にはいると、日常にありふれた些細な音に興味が移る。そのころから、オルゴールを使ったサウンドオブジェが登場する。

藤本は1997年から10年間を一区切りに、毎年1日だけ開催される「美術館の遠足」と題した展覧会を西宮市大谷記念美術館で開催してきた。昨年、最後の「美術館の遠足」を終えて、今年もまた同じ会場で個展を開くのは、集大成という意味合いかからか。初期の作品から近作までおよそ70点が展示されている。多数のオルゴールのオブジェは観客が自由に聴き回し、館内にはオルゴールの音色が響いていた。

国立国際美術館では、最新作を含む24点が展示されている。巻き名の「+/-」は、展覧会名にもなっている。この「+/-」という作品は、213台のオーディオを使った壮大なオブジェ。その一つ一つからは異なる音楽が流れている。近づいて1台

【学芸員 斎藤武郎】

## 近ごろの美術館 多様な鑑賞支援の方法を考える —パリアフリー研修を終えて (ユニバーサル・デザイン)

平成19年7月9日(月)、当館のボランティアスタッフを対象に「パリアフリー(ユニバーサル・デザイン)研修会」を開催しました。この研修会の目的は、視覚障害者に対する鑑賞支援の方法を学ぶことを通じて、お客様に対する「おもてなしの心」や「作品の鑑賞と解説」といったことを改めて意識してもらおうというものです。当日は、館職員も含め44名が参加しました。当館のボランティア組織は、県民の誰からも親しまれるようになります。

光島氏が制作した『京阪天満橋』という立体コピー(描かれた線が盛り上がりしている教材)作品を使用し、手で触れる

鑑賞を体験しました。光島氏は10歳の時に完全に失明した全盲の光島氏が絵の説明をするボランティアスタッフ

方です。参加者は全員アイマスクをして、彼の案内にそって『京阪天満橋』に描かれている凹凸をなぞっていきます。じつはこの作品、光島氏が利用する京阪天満橋駅のホームから地上に出るまで歩く道のりが描かれています。凹凸をなぞっているときの参加者の印象はどういうものだったでしょうか。視覚で確認できぬ分、それぞれの頭の中よりリアルに京阪天満橋駅の様子が想像できていたかもしれません。

つづいて、実際に言葉を通して作品を鑑賞したり解説をするという行為を体験しました。使用した作品は、当館の所蔵する牧谿の「老子図」、原田直次郎の「風景」、坂田一男の「コンボジション(メカニックエレメント)」の3点。光島氏に対する作品説明は1作品につき当館ボランティア2名と鈴木智子氏をお招きし、目の不自由な方に対して言葉を通しておこなう作品解説を体験しました。

(中略)

研修会は2部構成でおこないました。午前は第1部「アイマスクをつけて館内を歩いてみよう」というもので、参加者が2人1組となって、ひとりがアイマスクを着用し、もう1人が館内を案内するというワークショップ。午後の第2部では「ミュージアム・アクセス・ビューの取り組みを知ろう」と題して、京都を拠点に視覚に障害のある人たちに対して鑑賞支援をおこなっているグループ、ミュージアム・アクセス・ビューの光島貴之氏と鈴木智子氏をお招きし、目の不自由な方に対して言葉を通しておこなう作品解説を体験しました。

第1部の「アイマスクをつけて館内を歩いてみよう」では、エントランスから地下展示室、2階展示室の順番に役割を交代しながら館内を回りました。いつも何不自由なく行き来している場所も、アイマスクを着用することで未知の空間になります。誘導役も、普段来館者に対しておこなっている案内・説明とは全く勝手が違い、どのように声かけをすれば、アイマスクをしたパートナーが安心して歩くことができるのか試行錯誤の様子でした。視覚障害者を案内するには、もちろん適切な声かけや説導の方法があるでしょう。それらを学ぶことは重要です。しかし、その前提となる「心のパリアフリー」が一人一人のなかに意識されなければ意味がありません。美術館を訪れる障害者にとって一番の障害は体が不自由なことではありません。美術館を訪れたいと思ったとき、館側に受け入れの体制が整っていないから、建物の構造上の問題で不自由があつたりすることが一番の障害なのであります。しかしさいわいにもそれらの障害の多くは我々の意識次第で解決できます。当館ボランティアのモットーである「ホスピタリティ(おもてなしの心)」の大切さをあらためて実感することの出来たワークショップでした。

(中略)

研修に参加したボランティアスタッフや職員は皆、今回の体験や実践をつうじて、あらためて、来館されるあらゆるお客様への「おもてなしの心」の重要性を意識したことでしょう。また、作品を言葉で説明するという鑑賞法に触れ、普段よく知っている作品でも、「じっくり見る」「言葉で伝える」という行為を通じて、描かれたものを再認識したり、新しい発見をした方々がいたのではないかと想ひます。

これらの経験は、今後ボランティアスタッフの活動に大いに生かされていくに違ひありません。

(中略)

【学芸員 斎藤武郎】

ミュージアム・アクセス・ビュー URL:[http://www.nextftp.com/museum-access-view/access\\_top.html](http://www.nextftp.com/museum-access-view/access_top.html)

## 研究ノート イサム・ノグチ作《Sesshu》について



現在のユネスコ庭園(部分) 2006年11月、著者撮影

©2007 The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum / ARS, New York / SPA, Tokyo

ノグチが感激したのは、莊重な空間を創出せしめる石や岩の姿であり、それを生み出す雪舟の筆力だったのです。《山水長巻》を見て、何よりもまずそこに描かれた石の数々と、それらの組み合わせが創り出す空間美に感じ入るとは、日々石と対峙する彫刻家の感性といえる。また、ノグチの《山水長巻》に注ぐ眼差しが、日本の庭園や庭石へ向けるそれと共に通していたという長谷川の指摘は興味深い。なぜなら、ノグチはこの後まもなくして、彼の仕事の最大の特徴ともいえる作品としての庭園づくりを開始し、晩年まで展開し続けるからである。庭園づくりにおいてノグチは雪舟と同様に、と言つても平面と三次元という大きな違いはあるが、石を組み合わせ、構成して、美的空間を生み出す作業を行っていくことになる。

ノグチにとって比較的規模が大きく時間も要した本格的な造園は、パリのユネスコ本部前の庭園が始まる。ユネスコから仕事のオファーを受けたのが1956年、雪舟作品に出会ってから6年が経過していた。ノグチは、ユネスコ庭園に日本の素材を多用している。特に石は、自ら徳島や岡山、香川(小豆島)などを回って選定し、フランスへ送った。パリの現場では、それらを立てたり組み合わせたりして配置した(同版参照)。ユネスコ庭園は一見日本庭園ではあるが、ノグチが志していたのは日本庭園そのものではなかった。彼は日本庭園を強く意識しながらも、石を彫刻的因素としてあつかうこと、そこに新たな自然を出現させようとしていたのである。(註2)しかし実際には、ノグチは日本の石の扱い方にまだ不慣れで、造園の経験も少なかったため、石の配置をはじめ工事の進行そのものに相当な苦労を強いられることになる。

ユネスコ庭園の過程については別に詳述するが、彼が目指した新しい自然の創出は簡単に結実するものではなかったのである。ユネスコ庭園は、1959年によく完成をみる。(註3) 最後に、ノグチと雪舟、これを強引にまとめてみたい。ノグチは長谷川を介して、雪舟作品に出会い、感激した。その8年後、アルミニウムで作品《Sesshu》を制作した。その間に彼は、日本の石と向かい合い、新たな自然の創出を試みていた。石での空間造形に奮闘するノグチの視線の先には、「自由無礙に、立体を、塊を、量を、美と力とを以て創り出し、自在にそれらを組合せ配置して、次々と豊かな空間美を描き出して行く力量であった。」(註4)

(中略)

雪舟の姿があつたことだろう。そしてその眼差しには、羨望の色が差していたのかも知れない。

(中略)

ユネスコ庭園の仕事を終えたノグチは、自宅のあ

る

【学芸員 山吹知子】

註1 「雪舟漫語」長谷川三郎(雑誌「国華」1950年7月、国華社、P242)

註2 「イサム・ノグチ 宿命の越境者 下」ドウス昌代(2000年、株式会社講談社、P161)

註3 「イサム・ノグチ 宿命の越境者 下」ドウス昌代(2000年、株式会社講談社、P164)

註4 「Isamu noguchi a sculptor's world」Isamu Noguchi (1968年、Harper & Row, Publishers, P36)

註5 「Isamu noguchi a sculptor's world」Isamu Noguchi (1968年、Harper & Row, Publishers, P36)

註6 作品《Sesshu》の重量感は、後年ノグチが手がける石彫作品の塊(マッス)と量(ヴォリューム)を予言するものであるとの指摘がある(『ISAMU NOGUCHI』Sam Hunter, Abbeville Press, Inc. Publisher, P112)。同文献が作品《Sesshu》として掲載している図版は、ノグチの他の作品であるため、本文で触ることは控えた。